

《原 著》

## 肺血栓塞栓症の重症度評価における心電図変化の有用性

肺血流シンチグラフィおよび心エコー図からの検討

小板橋紀通\* 外山 卓二\* 星崎 洋\* 大島 茂\*  
谷口 興一\*

\* 群馬県立循環器病センター循環器内科

要旨 肺血栓塞栓症 (PTE) の重症度評価における心電図変化の有用性を肺血流シンチグラフィと心エコー図から検討した。

PTE と診断した症例 17 例 (年齢  $72 \pm 12$  歳) を対象とし, 入院時心電図所見において Sreeram らの PTE 心電図基準 7 項目の有無と陽性所見数を求めた。肺血流シンチグラフィは 18 区域の欠損程度を評価し, 総和を total defect score (TDS) とした。心エコーの右室負荷所見を右室拡大および中隔圧排所見から 3 段階で評価した。

心電図陽性所見数は, 心エコー図上での右室負荷のある群で多く ( $p < 0.01$ ), また TDS も右室負荷のある群で有意に高値であった ( $p < 0.01$ )。TDS と心電図陽性所見数は良好な正相関 ( $r = 0.75$ ) を示した。

PTE における心電図陽性所見数は, 肺血流シンチグラフィの欠損程度ならびに心エコー図の右室負荷所見と関連が強いことから, PTE の重症度評価を心電図変化から推測可能と考えられた。

(核医学 37: 645–651, 2000)